

校章への思い



中条高校の校章は、六角形の雪の結晶をペン先に見立たデザインとなっています。

雪の結晶は、一つとして同じものが存在しません。また、六枚の花弁のように見えることから「六花（りっか）」とも呼ばれており、まさにこの校章は、生徒一人ひとりが世界に一つだけの花となるよう、願いが込められた形のように思えます。

校歌の4番に「六花（りっか）の校章（しるし）の誓」という一節があるため、どのような意味を含めてこの歌詞が作られたのか、校歌についての資料や記録を探しましたが、残念ながら見つけることができませんでした。

校歌制作当時の想いを知ることは叶いませんでしたが、「六花」に込められた意味を、次のように考えました。

- 生徒一人一人が雪の「雪片（せっぺん）」のように舞いながら、中条高校という「結晶体」に集まり、集まった生徒がきれいに、そして、しっかりと結びつき、六角形の「雪の結晶」のごとく、美しく形あるものになってもらいたいという思いを含めて、「六花（りっか）」という言葉を使ったのではないか。
- 中条農業高校から中条高校となった昭和42年には、①普通科②農業科③被服科④定時制⑤黒川分校⑥加治川分校があったことから、それぞれが、一生懸命に勉強に取り組んで成果を上げてほしいという思いから、校章に6つのペン先をかたどったのではないか。
- 「六花のしるしの誓」として、校歌の①鉄腕きたうる②叡智をみかく③明朗闊達④大志をいだきて奮いたてよ⑤作らん輝く文化の日本⑥建設の意欲、これらを「六花のしるしの誓」として取り組むことで、校歌の最後の詩にある「躍進続けん希望のかなた」へとつながり、結びの言葉になるのではないか。

先人が校歌に託した想いや、六花の校章（しるし）の意味を一人ひとりが考え、自覚し、創立114周年の歴史と伝統を感じながら、中条高校のかけがえのない一員として高校生活を過ごして欲しいと思います。

